

東西文化交流の研究成果を セミナーと展示会で発表。

東西美術交流研究センターでは、AJOSCの助成を受けてシルクロード諸国で撮影された膨大な画像や映像をデジタル化してきた。2011年度はそのデータを展示会やセミナーなどで活用し、研究成果や過程を発表する年となった。

トプカブ宮殿の 「謎めいた絵画作品」を初公開。

イスタンブール旧市街にあるトプカブ宮殿。オスマントルコ帝国の君主が居住したこの宮殿には約45冊の画帳(アルバム)があった。その中にいつ、どこで、誰が、何の目的で製作したのかまったく不明の「謎めいた絵画作品」と言われる4冊の画帳がある。国立民族学博物館 名誉教授であり、東西美術交流研究センター 代表の杉村棟さんは1970年に日本人として初めてこれらを調査・撮影した。

以来、研究を重ねてきたが、その成果を2012年9月に中部大学民俗資料館との協業による写真展として発表するため、2011年はそのための資料整理に追われた。

「シルクロードを通して、実にいろいろな文化が東西を行き来したことがわかる」と杉村代表は語る。

例えば、円形構図。中国では宗教的な内容から、動物に至るまで円形で表現されることが多い。一方、ペルシャやトルコの

通常の絵には円形構図はない。ところが、「謎めいた絵画作品」の中にはトルコで描かれた人物像が円形構図で描かれている。

さらに、興味深い絵もある。中国の水彩画では、空間を生かして植物の全景を描くのに対して、トプカブ宮殿の画帳では枝だけが地面から突出したように描かれている。

「当時のトルコにおいて植物は『実』にこそ意味があったのです。だからこういうアレンジになった」と杉村さん。

その他、当時のイスラム圏にはなかった絵巻形式の作品や鷹狩りの絵など、文化交流を偲ばせる作品が多数あ



「カシミヤショールとペイズリー文様」展の様子



デジタル化したシルクロード写真が使用されたセミナーの様子

る。特に鷹は当時、王室間で贈答品になるほど人気だったという。

本邦初の秘蔵画帳写真展開催により、多くの人の目に触れることで、もっと多角的な視点から発見があるかもしれないと杉村さんは期待を寄せている。

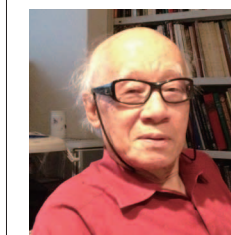
ファッションや医療・福祉の面から 東西文化交流を眺める。

2011年は東西美術交流研究センターにとって活動分野拡大の年でもあった。2011年11月15日～2012年1月13日には中部大学民俗資料館で「カシミヤショールとペイズリー文様」と題した展覧会を開催した。

日本では「勾玉模様」と呼ばれるペイズリー文様はカシミヤショールと共にペルシャで生まれた。その後、インドのカシミール地方で発展し、イギリスにもたらされた。スコットランドのペイズリーで、この柄の織物が盛んに作られるようになったためこの名がある。その後、ショール産業は衰退したものの、ペイズリー文様はさまざまな形で生き残り、古代の東西文化の往来を物語っている。

2012年1月23日には大阪府の千里万博公園内にある国立民族学博物館で、「インドの女神儀礼布の製作現場から」と題するセミナーを開催した。講師は同博物館文化資

担当者より



デジタルデータの
活用の段階に
入りました。

東西美術交流研究センター
代表
杉村棟さん

助成を受けた「シルクロードの総合調査」の写真・映像の整理・デジタル化が進み、今年度はそれを活用した研究と発表を行うことができました。多様な分野との連携は、資料の活用を広く知らしめる意味でも意義があります。このデジタルデータが本領を発揮するのはこれからです。

源研究センターの上羽洋子さん。儀礼布とは、宗教の祭祀に用いられる布でインドにおいては必需品である。上羽さんは現地調査を行い、実際に製作に従事した過程を交えて、染色技術や儀礼の意義などについて語った。

また2012年3月27日には、同じく国立民族学博物館で、美術史の専門家として日米の大学で教鞭をとられたブルース・ダーリングさんを講師に招き講演会を行った。テーマは「オリエンタリズムとモード・マリアノ・フォルチュニの世界」と「医療・福祉の現場における芸術の役割—アートと医療・福祉と協働を探る」の二本立て。マリアノ・フォルチュニはスペイン・グラナダ生まれの服飾デザイナーだが、その他に絵画、舞台芸術、写真、インテリアデザインなどにも才能を発揮した人物である。ギリシャの「デルフォイの馭者像」にヒントを得て、絹地に細かいプリーツを施した「デルフォイ」を立案した。もう一方のテーマは、芸術を医療や福祉に役立てる発想を古くからの事例を元に解いたものである。

いずれの企画でも同センターがデジタル化したシルクロード写真が活用された。また女性を意識し、現代の生活から歴史や東西文化の融合について見つめ直すという主催者側の意図が反映されている。同センターでは、今後もさまざまな視点や発想からの発表を行い、東西相互文化の理解を深めたいとしている。